



た。そのような時、歴史ある『幼児の教育』の雑誌作りをお手伝いしたことは、特に父が喜んでくれたようです。毎月の締切に追われながら原稿集めに精を出している娘の姿を見ることは、父にとつてどこか心落ち着くものがあつたのでしょう。私が目を回して起き上ることのできないメニエル氏症候群という病気で倒れた時、校正をすませたゲラ刷りを、父がフレール館まで届けてくれました。

ところで、私が担当した編集時代、その間の記念すべき出来事は、復刻版の『幼児の教育』の出版です。しかし、高額な復刻版は、私のお財布では入手がためられました。ところが父が、それはやはり購入すべきだと強く言い出しました。そこで分割払いで求めることにしたのです。明治三十四年の創刊号から大正九年までの二十年間分の復刻版が、今、手許にあるのは、そういうことからです。なお復刻版の出版は、その後、第二期、第三期と続き、五十五年間分が出版されました。

もう一つ、編集につながる思い出の品が残っています。雑誌の表紙の絵は、フレール館の河合隆一編集長が、フレール館に関連のある画家さんに、特殊事情を理解してもらつて特別に依頼していました。そのようにして創作された絵画を、借用させてもらったのです。絵は季節ごとに色を変え、二色刷りの印刷で表紙を飾っていきました。新しい年に、どんな画家さんが、どういう絵画を描いてくれるのか、楽しみでなりませんでした。

さて、七十七巻の表紙の画家として、河合編集長は梶山俊夫さんを選びました。出来上つてきたのは、墨絵に朱色の絵具で彩色された、男の子が逆立ちして、女の子と並んで

いるデザインの、躍動感に溢れた作品でした。昔話や民話に絵を描くことの多い絵本画家・梶山さんの子どもの絵は、河童のようでもありますが、洒落たモダンな味わいも漂っていました。目を大きく見開いて、こちらをジッと見つめている子どもは、どこか異次元の子どものようで、心惹かれました。

そこで或る日、思い切つて梶山さんに連絡をして、原画がほしいので譲ってもらえませんかとお頼みしてみました。すると快諾して下さいましたので、早速、千葉のお宅へ作品を受け取りに伺つたのです。そうしますと梶山さんは、目がパッチリと大きくて、ギョール人形のように目が印象的な顔立ちの方でした。すぐに絵の中の子どもの顔は、画家御本人の顔を写していることに気づいたのです。絵は、「遊ぶ子」と題されていました。こうして我が家には、七十七巻の表紙の原画が額に納まって掲げられています。あれからずっとずっと今にいたるまで、子どもの目は私を見つめ続けているのです。

当時、編集作業をしながら、私は、時折、児童文化探訪の記事を書かせていただきました。線香花火、紙風船、リリヤン、ローセキ、羽子板、雛人形などなど、おもちゃ作りの職人さんを探しては訪ね歩いたのです。玩具が作り出される工程を目で見ては、職人さんの話を聞き、記事にまとめていきました。子ども時代に遊んだ玩具の取材でしたから、こんなに楽しいことはありませんでした。いそいそと取材に出かけていきました。

現在、大学に勤めて、児童文化という授業を担当しています。また人形玩具学会に所属

